

b 入舟遺跡・大川遺跡出土の魚形石器

高瀬克範（北海道大学文学部学生）

はじめに

魚形石器は、北海道統縄文期の恵山文化に特徴的にみられる結合釣針の石製軸部である（高瀬1996）。大川遺跡（1989～1994年度）からは、これまでに未製品も含めて9点出土しており、95年度の入舟遺跡の発掘調査においても4点が出土した。ここでは、これまでに入舟・大川遺跡から出土した魚形石器を紹介し、他遺跡との比較をまじえて両遺跡出土資料の特徴についてふれてみたい。

〔1〕入舟遺跡出土の魚形石器

1（図17-1） 遺構外出土の完形資料である。長さ24.6cm，幅4.5cm，厚さ4.5cm，重量347gであり，石質は砂質凝灰岩である。頭部と尾部にそれぞれ1本，体部に2本の溝がめぐる。魚形石器の表面を全周する溝が体部に2本存在する点，さらに全体的に湾曲した形態が特徴的である。頭部先端には明確な「ノブ」が作出されている。溝は頭部と尾部にめぐるのが太くて浅い。それにたいして体部にめぐる2本の溝は細くて深く，断面がV字状に刻みこまれている。頭部から尾部にかけて，（長軸に対して）縦位あるいは斜位の擦痕がみられる。頭部平面にも同じ方向の擦痕がみられる。擦切痕はみられない。

2（図17-2） 遺構外から出土したほぼ完形の資料である。体部の一部が欠損している。計測値は，長さ17.6cm，幅3.4cm，厚さ3.4cm，重量は216gであり，石質は砂岩である。頭部の先端はとがっており，魚形石器としては特殊な頭部形態である。頭部平面はみられるが，「ノブ」は作出されていない。体部断面は三角形に近い。溝は頭部と尾部に，それぞれ1本ずつめぐっている。頭部から尾部にかけて縦位または斜位の擦痕がみられ，頭部平面にも同様の方向の擦痕が残存している。擦切痕はみられない。

3（図17-3） 遺構外出土の，頭部が欠損した資料である。計測値は，長さ（14.8）cm，幅4.2cm，厚さ3.6cm，重量（230）gであり，石質は泥岩である。尾部に1本の溝がめぐる。体部から尾部にかけて，縦位方向の擦痕がみられる。擦切痕はみられない。

4（図17-4） 遺構外出土の，頭部および尾部が欠損した資料である。計測値は，長さ（11.6）cm，幅3.6cm，厚さ3.7cm，重量（211）gであり，石質は砂岩である。体部には斜位方向の擦痕が残存する。擦切痕はみられない。

〔2〕大川遺跡出土の魚形石器

1（図18-1） 中世の塚状遺構MO-3の覆土から検出された完形資料である。長さ20.2cm，幅4.9cm，厚さ4.9cmであり，重量は650gととっても重い魚形石器のひとつである。石質は砂岩である。体部が太く断面はほぼ円形を呈し，尾部の太さもほとんど変わらない。頭部の「ノブ」は

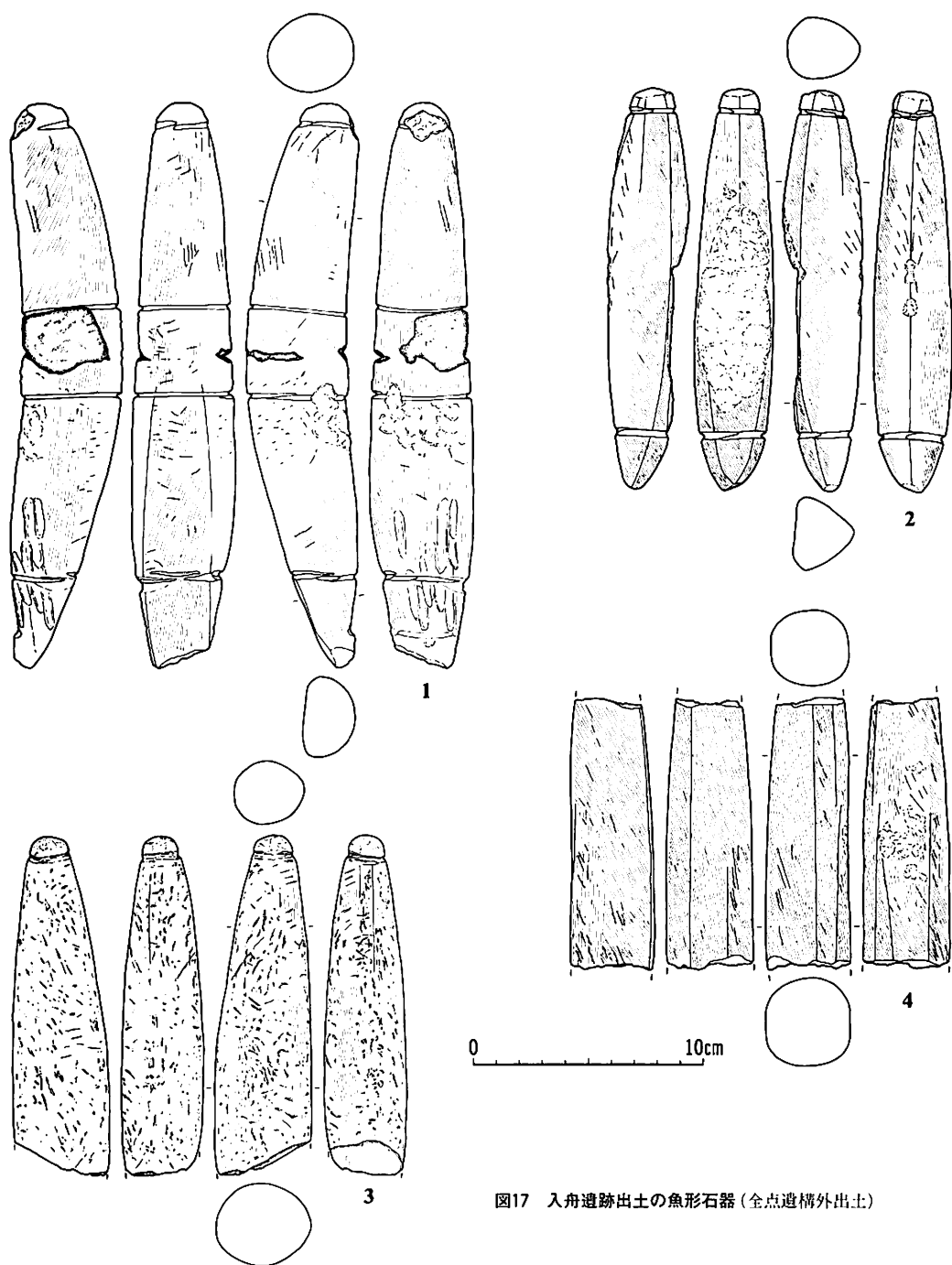


図17 入舟遺跡出土の魚形石器（全点遺構外出土）

みられないが、平面は明確に作出されている。太く浅い溝が、尾部に1本めぐり。資料表面には縦位方向の擦痕がみられる。擦切痕は観察されない。

2（図18-2） 中世の塚状遺構M0-8の覆土から検出された両端が欠損した資料である。一部に

敲打の痕跡もみられるが、入舟・大川遺跡出土魚形石器に特徴的な石質・形態・製作手法からみて、魚形石器の未製品の可能性がある資料としてとりあげる。計測値は長さ(18.6)cm、幅5.2cm、厚さ5.2cm、重量は(477)gである。石質は、砂岩である。資料表面には、縦位または斜位の擦痕がみられる。

3 (図18-3) GP-75出土の完形資料である。計測値は 幅3.5cm、厚さ4.3cm、重量349gであり、石質は砂岩である。全体的に扁平で、頭部平面の幅は広く、溝はみられない。頭部から尾部にかけて、縦位または斜位の擦痕がみられる。頭部平面は斜位あるいは横位の擦痕がのこる。擦切痕はみられない。

4 (図18-4) 図18-5とともに、GP-179から出土した完形資料である。本資料は、魚形石器の機能・用途の推定に重要な意味を持つために、すでに紹介されている資料である(宮 1993)。計測値は、長さ20.3cm、幅4.1cm、厚さ3.5cm、重量269gであり、石質は泥岩である。頭部には「ノブ」はみられないが、先端部が反りかえる。頭部平面は明確に認められる。溝は、頭部と尾部にそれぞれ1本ずつめぐっている。擦切痕はみられない。特筆すべきは、表面に残存する樹皮・繊維状の物質である。頭部の表面には、樹皮の巻き付け痕がみられ、2本の溝の中と体部下面にも紐と考えられる繊維質の物質が残存している。頭部平面の周縁部には木目痕が残っており、そこに何らかの装着物があつたことは疑いない。さらに木目痕の範囲から、魚形石器と装着物の接合面の形態が理解できる。表面の調整は、入舟・大川遺跡出土の魚形石器の中ではもっとも入念である。頭部には横位の擦痕が、胴部から尾部にかけては縦位の擦痕がみられる。頭部平面の調整方向は、観察できない。墓域にまかれたベンガラが、資料表面に付着している。

5 (図18-5) GP-179出土の完形資料である。図18-4とともに出土した。計測値は長さ22.4cm、幅4.6cm、厚さ3.5cm、重量401gであり、石質は砂岩である。頭部には「ノブ」がつけられ、幅広の頭部平面もみられる。溝は頭部・尾部に1本ずつめぐっている。全体に斜位方向の擦痕がみられるが、頭部平面のみ縦位の擦痕が残る。擦切痕は観察されない。

6 (図19-6) GP-359出土の完形資料である。次に紹介する資料とともに出土した。計測値は、長さ21.8cm、幅4.4cm、厚さ4.4cm、重量456gであり、石質は砂岩である。頭部には「ノブ」の作出はみられないが、幅広の頭部平面は存在している。体部は太く、その断面は円形に近い。溝は頭部に1本、尾部に2本みられ、すべて太く浅い。尾部に2本以上の溝がめぐる例は、江別市旧豊平河畔遺跡などで検出されている(図21-6)。表面全体に縦位もしくは斜位の擦痕が、頭部平面には斜位の擦痕がみられる。擦切痕は観察できない。

7 (図19-7) 図19-6同様、GP-359から出土した魚形石器の未製品と考えられる資料である。計測値は、長さ26.4cm、幅4.8cm、厚さ3.1cm、重量344gであり、石質は砂岩である。擦切痕が片方の側面にみられ、頭部平面は作出される過程にあると考えられる。溝は付されていない。表面全体に、縦位の擦痕がみられる。

8 (図19-8) GP-390出土のほぼ完形の資料である。頭部の一部が欠損している。計測値は、

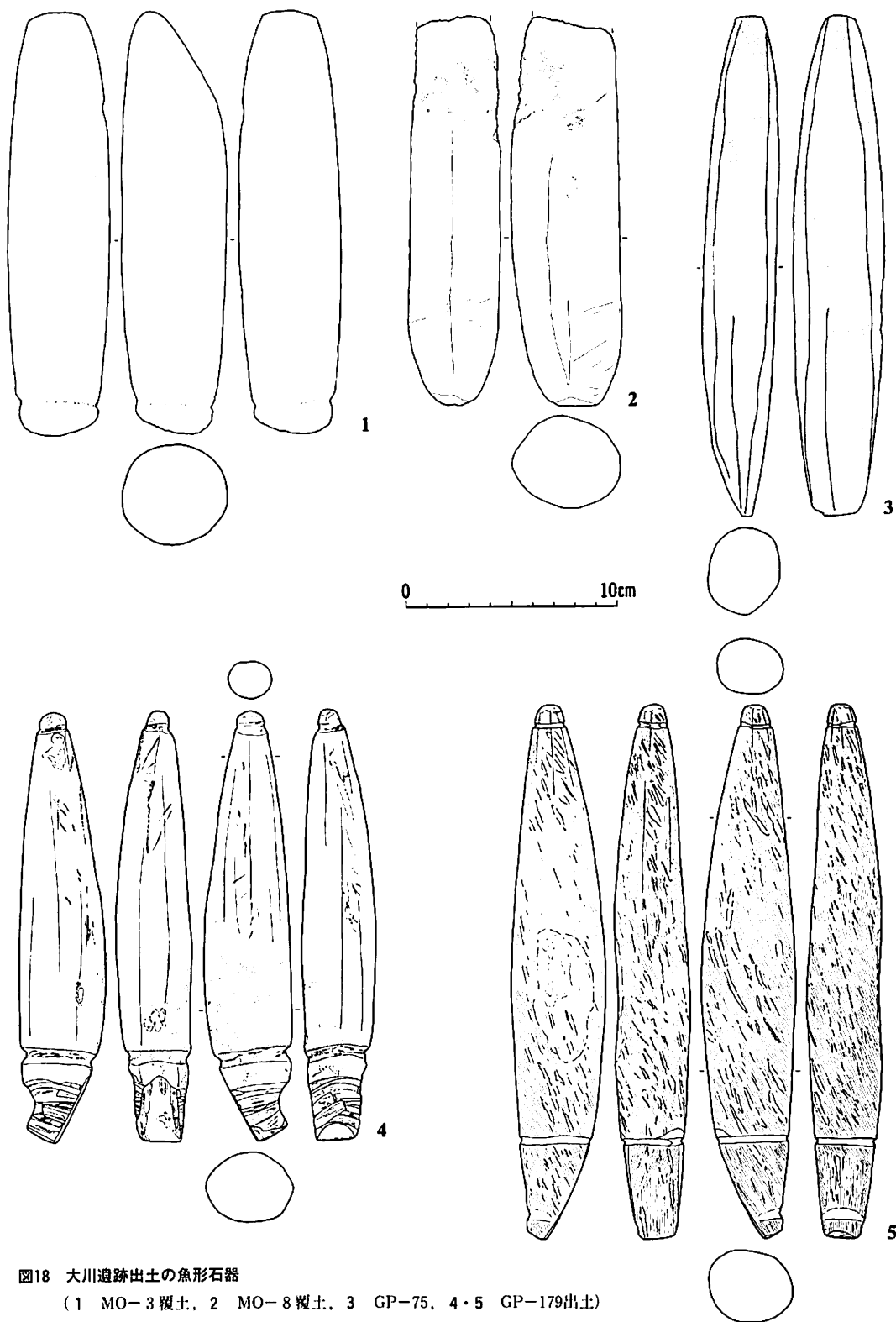


図18 大川遺跡出土の魚形石器

(1 MO-3 覆土, 2 MO-8 覆土, 3 GP-75, 4・5 GP-179出土)

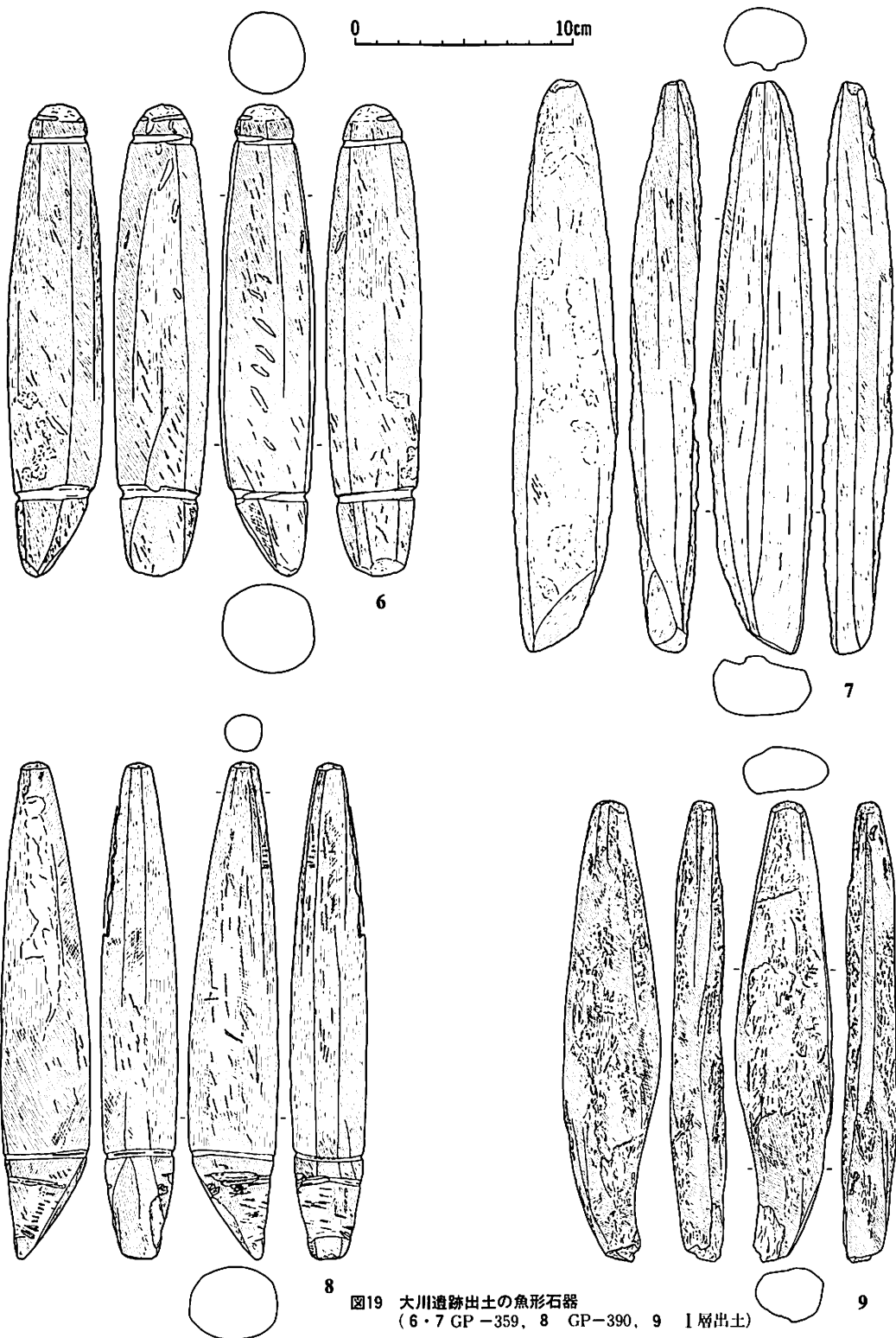


図19 大川遺跡出土の魚形石器
(6・7 GP-359, 8 GP-390, 9 1層出土)

長さ22.8cm、幅4.2cm、厚さ3.3cm、重量364gであり、石質は泥岩である。頭部と尾部の先端は細く、頭部と体部の境界付近に最大幅をもつ。頭部には、「ノブ」がつけられ、明確な幅広の平面がみられる。溝は、頭部に1本めぐり、尾部にはない。頭部を全周する溝の前に、浅い溝のようなものがみられるが、これは頭部へ装着物を固定するために巻き付ける紐などを固定するための「段」であり、溝ではない。それを示すように頭部の「ノブ」と「段」のあいだにだけ、植物質の巻き付け痕がみられる。同様の頭部形態は、尾白内貝塚などに類例がみられる（図20-5）。尾部には、巻き付け痕や変色帯はみられない。資料表面には、縦位または斜位の擦痕がみられる。擦切痕は観察されない。表面の一部にベンガラが付着が認められる。

9（図19-9） 遺構外出土の完形資料である（表採）。計測値は、長さ21.2cm、幅4.4cm、厚さ2.1cm、重量310gであり、石質は泥岩である。頭部に「ノブ」はみられなく、先端が反り返る。頭部平面は明確に作出されているが、溝はまったくみられない。擦切痕もみられない。頭部には横位の擦痕が、頭部平面および体部・尾部には縦位または斜位の擦痕が観察される。尾部の先端から幅1.5～2.0cmの変色帯があり、巻き付け痕の可能性がある。尾部に巻き付け痕が存在する例は、これまでも報告されている（石本編 1991、右代・高瀬 1994）。調整そのものは粗く形態も整っていないことから、未製品の可能性もある。

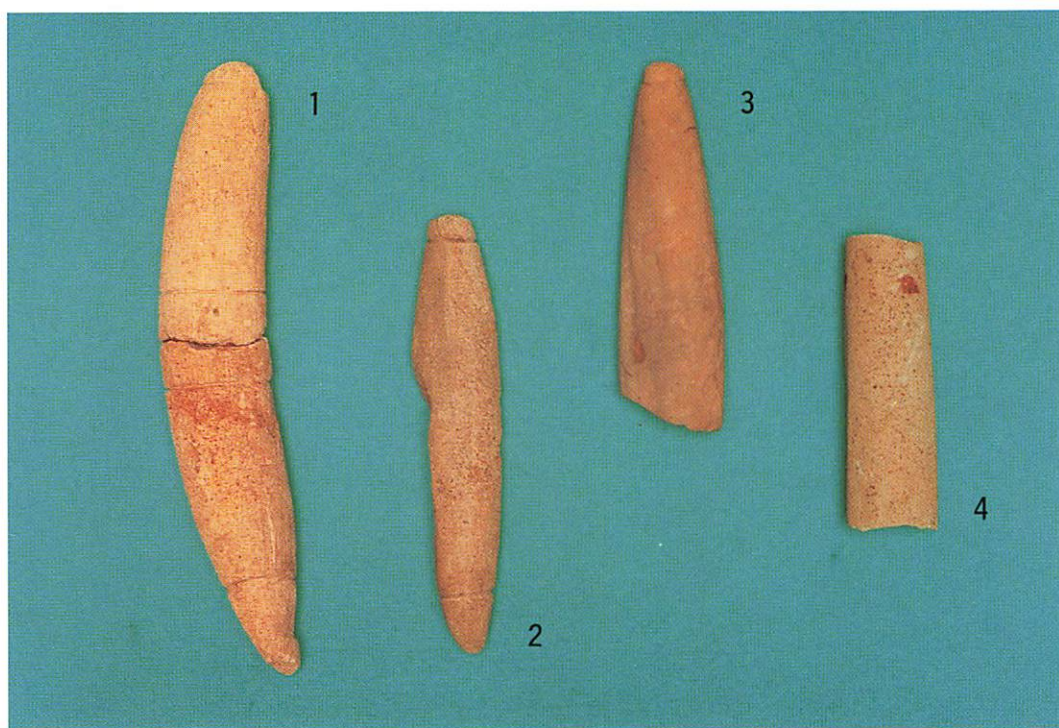


写真23 入舟遺跡出土の魚形石器

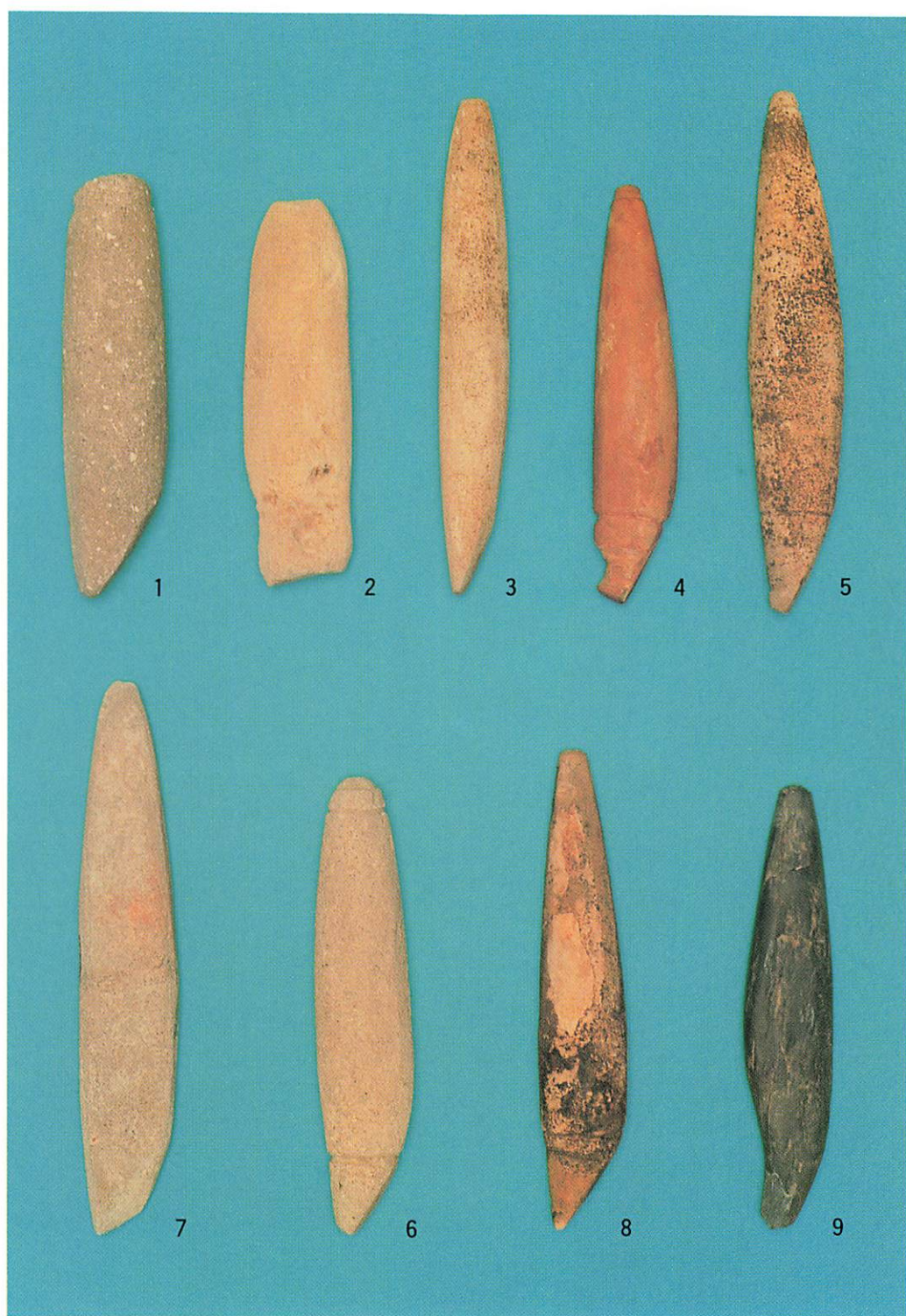


写真24 大川遺跡出土の魚形石器



◀ 入舟遺跡魚形石器出土状況
(W25Grid 1層出土、近世の整地
による攪乱層より出土)



大川遺跡魚形石器出土状況 ▶
(MO-3 覆土出土、MO-3 は中世の
壕状遺構である)



大川遺跡
GP-75 ▶
魚形石器出土
状況 (北側より
魚形石器出
土、他に靴形
石器・完形土
器 4 点伴出)



▲ 大川遺跡GP-75検出状況
(126cm×110cm、深さは概ね19cm)



大川遺跡GP-179検出状況 ▶
(東頭位とみられる、石器29
点伴出、統縄文期恵山式土
器を伴出)



◀ 大川遺跡GP-179
魚形石器出土状況
(右側の魚形石器
には結束あり)



大川遺跡
GP-359 ▶
魚形石器出土状況
(魚形石器 2 点・鉄
製品 1 点・他石器
66 点出土)



◀ 大川遺跡
GP-359
検出状況
(統縄文期、
恵山式土器
伴出)



大川遺跡GP-390 ▶
魚形石器出土状況
(石鏃・ナイフ・スク
レイパー・石斧伴出)



◀ 大川遺跡GP-390
検出状況 (145cm×
122cm、深さは概ね
80cm)

写真25 入舟遺跡と大川遺跡の魚形石器出土状況



写真26 大川遺跡GP-179—括出土遺物と魚形石器



写真27 大川遺跡GP-359—括出土遺物と魚形石器



GP-179出土の魚形石器(図18-4)



GP-179出土の魚形石器(図18-4)



GP-390出土の魚形石器(図19-8)

写真28 大川遺跡墓域伴出魚形石器接写

〔3〕入舟・大川遺跡出土資料の特徴

以上が、今年度までの発掘調査によって出土した魚形石器およびその未製品と考えられる資料である。これらの資料を他遺跡と比較するまえに、魚形石器が分布する北海道南部および中央部の状況を概観しておく。

道南部・道央部から出土した魚形石器は、破片資料も含めると150点以上にのぼる。それらは、(1)噴火湾北岸、(2)噴火湾南岸(津軽海峡地域も含む)、(3)渡島半島日本海側、(4)道央部、という地域ごとに特徴をもって分布している。それぞれの地域にみられる特徴は次のとおりである。

(1)噴火湾北岸(図20-1・2・4)

魚形石器の形態の変異の幅が広く、とくに頭部形態のバリエーションが非常に多い。特に石剣状あるいは頭部が斧状の資料も比較的多くみられ、同時に溝の種類や組み合わせもさまざまで、頭部を半環状にめぐる溝もみられる。石質は、良質の泥岩・粘板岩がもちいられることが多く、表面は入念に調整され光沢を持つものが少なくない。頭部の平面は明確に作られるが、幅が細く面積も小さい。また頭部には多方向の擦痕がのこるものが多く、縦位・斜位の擦痕がみられる体部・尾部の調整とは異なる。ただし、頭部下面に段を持つものや石剣・斧形のものは、頭部にも縦位・斜位の擦痕が残る例が多い。頭部・体部の厚さは幅に比べてうすく、尾部の溝から尾部の先端までが比較的長い。例として室蘭市絵鞆・祝津遺跡出土資料を図示する。

(2)噴火湾南岸(図20-3・5・6)

噴火湾北岸とおなじように、頭部形態のバリエーションに富む。しかし、石剣状・斧状の頭部は少ない。逆に、頭部全体を削って突出部をつくりだす例は増える。溝の種類も多く、頭部を半

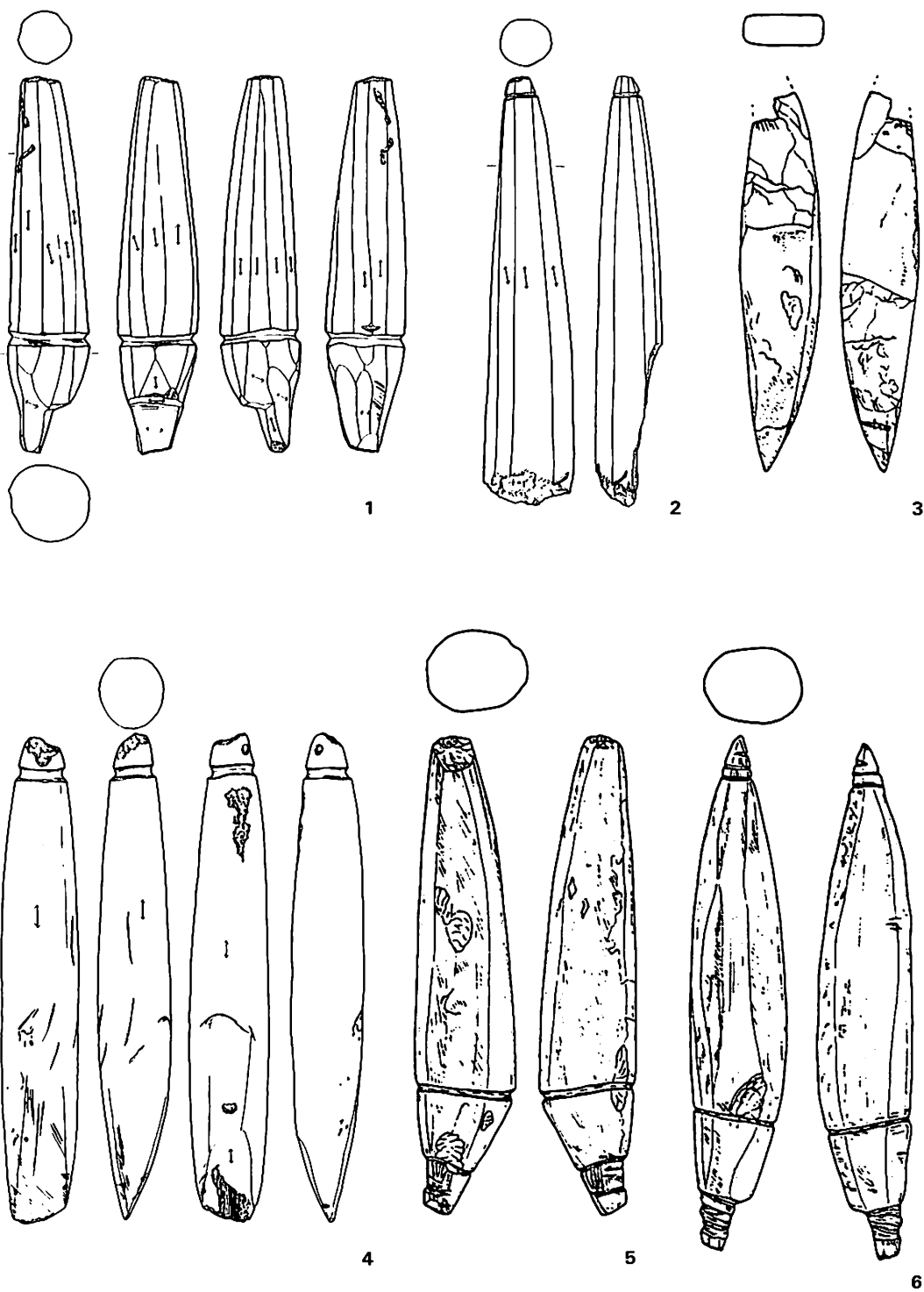


図20 噴火湾沿岸出土の魚形石器
 (1・4 室蘭絵柄出土, 2 室蘭祝津出土, 3・5・6 森町尾白内貝塚出土)

0 10cm

環状にめぐる溝も存在する。その他、石質・色調・形態・頭部平面・製作手法などは噴火湾北岸と共通する。例として森町尾白内貝塚遺跡出土資料を図示する。

(3) 渡島半島日本海側 (図21-1~5)

形態は噴火湾沿岸に比してシンプルである。頭部形態は単純に反り返るものが大半を占め、噴火湾沿岸でみられる石剣状・斧状の形態はみられない。一般に溝の本数は少なく、頭部を半環状にめぐる溝は少ないながらも存在する。厚さは幅よりもうすいものが多く、頭部平面は幅が広いものと狭いものの両方がある。また尾部の溝は、尾部の端に近い位置に刻まれ、尾部の溝から尾部の先端までが短い例が多い。その他石質・色調・製作手法に関しては、噴火湾沿岸と大きな違いはない。例として瀬棚町瀬棚南川遺跡出土資料を図示する。

(4) 道央部 (図21-6・7)

道央部の魚形石器は、石狩町紅葉山33号遺跡・札幌市N295遺跡・江別市旧豊平河畔遺跡でそれぞれ1点ずつ検出されているのみである。これらの特徴点は、砂岩で作られていることであり、頭部が残存する紅葉山33号と旧豊平河畔の資料では、頭部形態は明確な「ノブ」がつかずに反り返る形態である。また頭部平面の幅は非常に広い。製作手法、とくに頭部の作りだしは、道南部で一般的な多方向の擦痕がみられずに、体部・尾部と同様の単調な擦痕がみられる。例として江別市旧豊平河畔遺跡・石狩町紅葉山33号遺跡出土資料を図示する。

現在の資料から指摘できるこのように地域的な特徴をふまえ、入舟・大川遺跡出土資料について検討する。両遺跡の資料は、おおきくみて二群に区分することが可能である。ひとつは、砂岩・泥岩製で表面に入念な調整がみられるものである。あわせて頭部と体部の境界に最大幅を持ち、頭部・尾部の先端が細いという特徴を持つ。これらを1類とする(図17-3, 図18-19-3~8)。もうひとつは、砂岩・砂質凝灰岩製で、体部が太く断面が円形に近いものである。頭部・尾部の厚さと幅があり、溝が太く浅い。これを2類とする(図17-1・2・4, 図18-19-1・2・9)。さらに両群に共通する特徴として、次のような点が指摘できる。

- 1) 頭部形態は、複雑なものは少ない
- 2) 頭部平面の幅がひろい
- 3) 溝の本数と組み合わせのバリエーションが少ない
- 4) 尾部の溝からの先端までが短い(尾部の溝が、先端に近い位置に刻まれる)
- 5) 頭部に縦位・斜位の単調な擦痕がみられ、多方向の擦痕はみられない

このような特徴を持つ入舟・大川遺跡出土資料を、先述したような他の遺跡にみられる特徴とつきあわせると、噴火湾沿岸とは大きく異なっていることが理解できる。石質や形態・製作手法

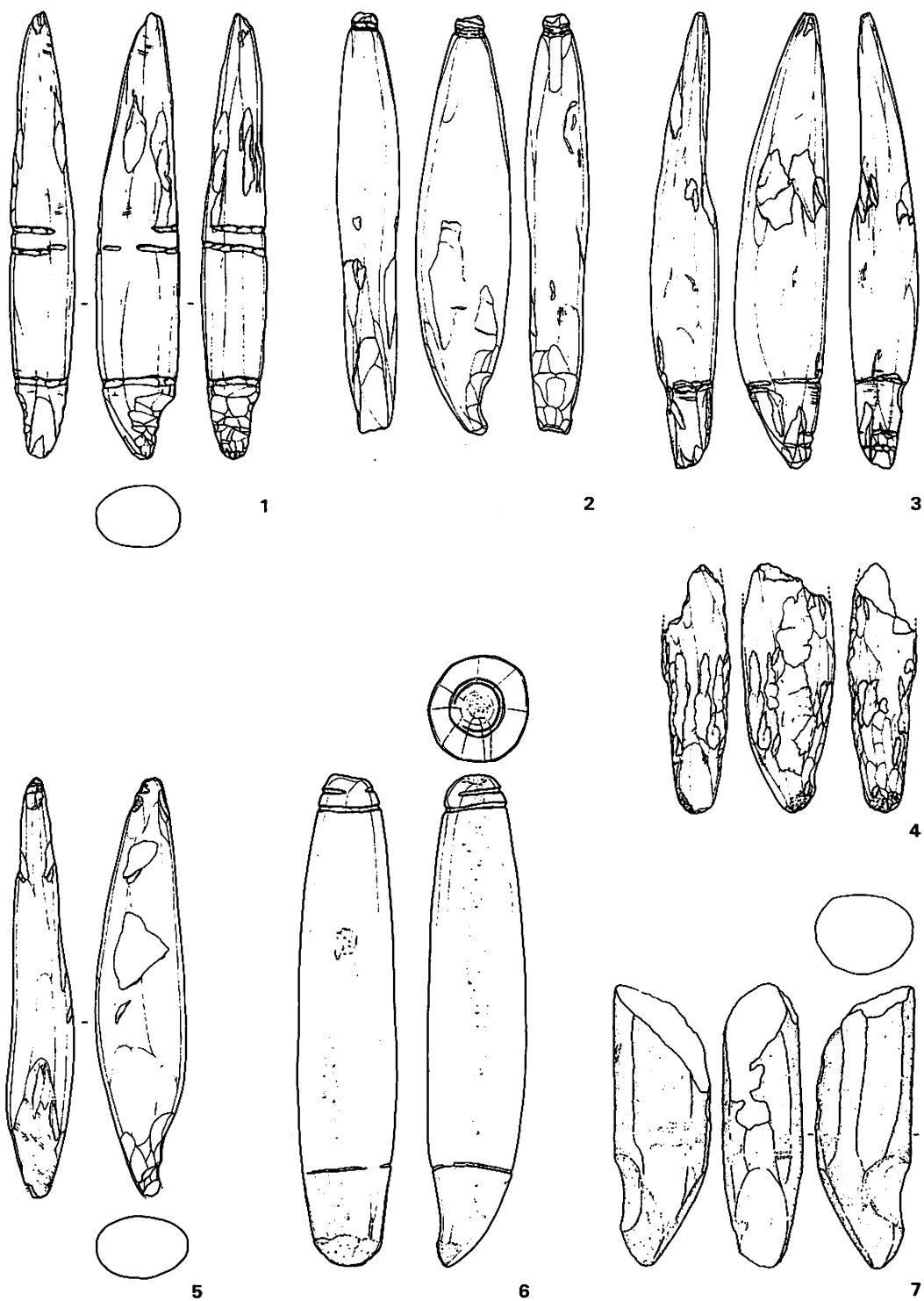


図21 波島半島日本海岸・道央部出土の魚形石器
(1～5 瀬棚南川出土, 6 江別市旧豊平河畔出土, 7 石狩町紅葉山33号出土)

0 10cm

などのあらゆる面で相違がみられるからである。

1 類と共通性を示すのは、渡島半島の日本海側である。瀬棚南川遺跡出土資料と比較すると、頭部と体部の境界付近に最大幅があり、頭部・尾部の先端が非常に細くなる点が共通する。さらに泥岩が用いられる場合が多い、反り返るだけの比較的単純な頭部形態が多い、頭部平面の幅が広いものが多い、尾部の溝が刻まれる位置、溝の種類・本数がすくなく単純な組み合わせをなす、などの点で類似点をみいだせる。

2 類にもっとも近いありかたを示すのは道央部である。道央の資料が不足しているため踏み込んだ議論は困難であるが、砂岩が多い点、「ノブ」をもたず直線的あるいは反り返るだけの単純な頭部形態などにおいて共通性を見いだすことはできる。

入舟・大川遺跡出土魚形石器のもっとも大きな特徴は、渡島半島日本海側と道央部にみられる特徴を持つ1類と2類が混在している点にある。

おわりに

入舟・大川遺跡出土の魚形石器を紹介し、石質・形態・製作手法からみたそれらの特徴について述べた。これにくわえて出土状況における大きな特徴としては、大川遺跡GP-179およびGP-359出土の魚形石器に鉄製品が共存している点をあげることができる。鉄製品の錆化がはげしく原形を推定することが困難な状況ではあるが、とくにGP-359では魚形石器の下部よりティア・ドロップ状の鉄製品が出土しており、魚形石器との関連（とくに鉄製の装着物の存否）が興味深い。今後、それが明確なかたちで理解できる資料の出土が期待される。

引用文献

- 藤田 登編 1993『尾白内2』森町教育委員会
石橋孝夫・清水雅男編 1984『紅葉山33号遺跡』石狩町教育委員会
石本省三編 1991『長万川遺跡』七飯町教育委員会
加藤邦雄ほか 1983『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会
宮 宏明 1993「墓域伴出の魚形石器と鉄製品」『南北海道考古学情報』4
大場利夫編 1962『室蘭遺跡』室蘭市・室蘭市教育委員会・市立室蘭図書館
高橋正勝編 1985『旧豊平河畔』江別市教育委員会
高橋克範 1996「恵山文化における魚形石器の機能・用途」『物質文化』60
石代啓視・高橋克範 1994「魚形石器―北海道開拓記念館所蔵資料―」『北海道開拓記念館調査報告』33